

J・A・ホブソン研究

—「帝國主義論」をめぐる一試論—

磯部浩一

序

J・A・ホブソンは、生前、經濟學界において注目はされたが、正當な評價を受けなかった。經濟學史の上においても、部分的にとり上げられたのみで、充分な評價を受けているとは言えない。それには理由がある。著書が五十八冊¹⁾というぼう大な數にのぼること、著述が體系的でなかったこと、異端者であると絡印づけられたために大學に正規の教授としてのポストが得られず、したがって弟子がいなかったこと、これらの理由はホブソンの評價を著しく困難にしたのである。

ホブソンは、このように充分に評價され、理解されることが困難であつたにもかかわらず、その與えた影響は大きかった。改革主義者、平和主義者、反帝國主義者として、多彩にして活潑な文筆活動を通じて、イギリスの政治、外交はもとより労働黨の發展にも、少なからざる影響を興えた。過少消費論においてケインズに「帝國主義論」においてレーニンに影響したこと

J・A・ホブソン研究

ホブソンのきわめて示唆に富む諸著作は、アイディアの倉庫であり、控え目にはあるが、アダム・スミスの國富論に比される²⁾。ホブソンを正當に評價し、充分に理解することは、われわれに残された課題であると思われる。

この課題に答える、ささやかな試みが本稿の目的である。すなわち、「帝國主義論」を中心として、ホブソンの學說、思想を理解せんとするものである。端的に言えば、「帝國主義論」が、ホブソンの學說の中で占める位置を明らかにすることによつて、ホブソンの全體を理解せんと欲するものである。帝國主義の學說史上におけるホブソンの地位は、副次的な問題としてのみ、ふれられるであらう。その本格的な説明は別の機會に譲られねばならない。

かくして、本稿はホブソンの學說を、一つの視角から、すなわち、帝國主義という視角から分析せんとするものである。しかし、この場合わたくしの第一次的な關心は、ホブソンの人と學說にある。特にホブソンの學說の全體的評價を強調したい。ホーマンは、かつてホブソンの學說について次の點を指摘し

た。ホブソンの學説には、前期と後期の著作に斷層があり、一貫性がないと言うのである。また最近、ネマーズが過少消費の學説上におけるホブソンの位置づけを行った。過少消費論には、リアル・タームによる議論と、マネー・タームによる議論とがある。ホブソンは前者であり、ケインズが後者であるという。ネマーズのホブソン評價は、過少消費論に限定されており、ホブソンの厚生經濟學については、經濟學外の領域であるとなし、特に前者との論理的關連がないと述べている。これらの指摘が正しいとすれば、ホブソンの學説に斷層があるというこの事實は如何に解釋されるべきか。この間に答えるためには、全體的な評價をする以外に方法はない。

帝國主義の概念は、後に明白となるように、單なる經濟的概念ではない。政治的、社會的現象を包攝する概念である。ゆえに、帝國主義の分析視角から、ホブソンを評價することは、全體的評價の目的にかなうものと考えられる。

以下、次の順序によって進めたい。

- 一 「帝國主義論」に對する評價と問題點
- 二 「帝國主義論」の要約
- 三 「帝國主義論」の形成まで
- 四 「帝國主義論」以後
- 五 むすび

(1) 矢内原忠雄譯「帝國主義論」下巻、昭和二十七年、三一五—三二〇頁の著述目録と Erwin Esser Nemmers,

Hobson and Underconsumption, Amsterdam, 1956, pp. 144—5. の著述目録による。著書は五十四冊、共著及編著は四冊である。

(2) M. Bronfenbrenner, in the Foreword to E. E. Nemmers, *op. cit.*

(3) P. T. Homan, *Contemporary Economic Thought*, New York and London, 1928, p. 374.

(4) *Ibid.*, pp. 366—7. ホブソンは前期においては、正統派の概念や用語をそのまま用いて、かれ獨特の結論、すなわち、産業制度が生み出す剩餘の分析を行った。後期においては、社會改革の基礎として、富の「人間的」評價の方法を考察した。この前期と後期の分析には、明確な思想の不一致があると、ホーインは云っている。

(5) E. E. Nemmers, *op. cit.*, pp. 3—4.

一 「帝國主義論」に對する評價と問題點

ホブソンの「帝國主義論」は一九〇二年に初版、一九〇五年に修訂第二版、一九三八年に全訂改版、一九四八年に第四版が出ている。

これまでは、かれの著作が出版されると、エコノミック・ジャーナルなどの學術雜誌によって書評をされるのが常であった。しかし、「帝國主義論」の書評は、學術雜誌によってはなされていまいようである。學界が「帝國主義論」の出版に對して

とった態度が、これで知られよう。

ウインスロー⁽⁷⁾によれば、「帝國主義論」には、次のような評價がなされている。「帝國主義者の教理と實踐に對する古典的な告發」である。また、「現代政治の科學的研究に對する、われわれの時代のもっとも顯著な貢獻の一つ」である。

かくして、ウインスロー自身は、ホブソンの帝國主義論を経済的帝國主義論と規定して、次のように述べている。「經濟的帝國主義の理論はこのように擴がったが、直接にまた間接に、ほとんどすべての學説は、出發點として、ホブソンにまでさかのほる。」⁽⁸⁾

レーニン⁽⁹⁾は次のようにホブソンを評價している。「ホブソンは近代的帝國主義の二つの『歴史的・具體的な特徴を——すなわち、一、いくつかの帝國主義の競争、および二、商人の役割よりも金融業者の役割が支配的であることを——カウツキーよりも、より正しく確認している。』しかし、ホブソンが、「帝國主義の不可避性」に反對し、資本主義の下で消費能力を高めることによつて、帝國主義を解決できると考えていることを批判している。」⁽¹⁰⁾

つぎに問題点を挙げよう。第一の問題点は、ウインスローがホブソンの「帝國主義論」を経済的帝國主義と規定することに關してである。第二の問題点は、第一の問題点と關連するが、ホブソンの帝國主義に對する見解の變化に關する。これは、ウインスロー⁽¹¹⁾、靜田均教授、ネマーズ⁽¹²⁾の指摘するところであり、

ホブソン自身も、ある意味では認めているところである。⁽¹³⁾この見解の變化は如何に理解されるべきか。これが、第二の問題点である。第三の問題点は、帝國主義の必然性に關する問題である。第四の問題点は、帝國主義政策の推進體としての、金融業者および獨占大資本の役割と、その評價など、政策主體の問題である。⁽¹⁴⁾

本稿は、第一、第二、第三の問題について、説明することを目的とする。第四の問題点については、別の機會に譲りたい。

(7) E. E. Nemmers, *op. cit.*, p. 147. Book Reviews of Hobson's Works.

(8) E. M. Winslow, *The Pattern of Imperialism: A Study in the Theories of Power*, N. Y. 1948, pp. 49—50.

(9) P. T. Moon, *Imperialism and World Politics*, p. 475 n.

(10) Braistford, *The War of Steel and Gold*, p. 74.

(11) E. M. Winslow, *op. cit.*, p. 50.

(12) レーニン「資本主義の最高の段階としての帝國主義」宇高譯、一五〇頁。

(13) 同書、一五九—一六〇頁。

(14) E. M. Winslow, *op. cit.*, p. 102.

(15) 靜田均「反帝國主義者ホブソン——帝國主義の經濟學」(二)——「經濟論叢」第七十四卷、第三號、昭和二十九年九月、十一頁。

(15) E. E. Nemmers, *op. cit.*, pp. 48—50.

(16) J. A. Hobson, *Confessions of an Economic Heretic*, London, 1938, pp. 63—4. ホブソンは當時かれが

歴史の經濟的決定論を極端にまた單純に唱道しており、社會學者と呼ばれるにふさわしい、經濟學、政治學、倫理學の相關連する本質について、明確な見通しをもっていないかったという意味のことを書いている。

(17) 金融業者がこのような集中力を持つに到らなかったであろうという説(宇野弘藏、「經濟政策論」昭和二十九年、二二四—五頁)とイギリスの金融資本の成立を歴史的に分析した結果ホブソンの主張に賛成する説(生川榮治、「イギリス金融資本の成立」昭和三十一年、三〇六頁)とがある。

二 「帝國主義論」の要約⁽¹⁸⁾

「帝國主義論」は第一部「帝國主義の經濟學」、第二部「帝國主義の政治學」から成立している。第一部の前に、「ナシヨナリズムと帝國主義」という、獨立した短い一章がある。ホブソンはここで、帝國主義の概念規定について論じている。

最初に注目されることは、ホブソンは帝國主義について一義的な概念規定を與えていないことである。帝國主義の概念規定は不可能でもあるし、概念の嚴密さを求めることは無駄である。なぜかと言えば、これらの概念は社會の思想變化に影響されるばかりでなく、政治屋によって歪められるからである。そ

れゆえ、ホブソンは帝國主義に類似するナシヨナリズム、インター・ナシヨナリズムおよび植民主義の概念との關係において、帝國主義の概念を明らかにしようとする。もっとも、これらの諸概念もまた變化することが注意されている。

ナシヨナリズムは十九世紀の支配的要因であり、分離の形態と集中的な形態とが見られた。ナシヨナリズムは民族のわくを越えて、政治的連合を作ることもあったが、その一般的傾向は民族的統一である。

ホブソンは、純粹なナシヨナリズムからの逸脱が不純な(spurious)植民主義と帝國主義であると規定する。純粹な植民主義とは、母國と同じ市民権をもつ者の社會の擴張である。不純な植民主義は帝國主義に近いものであり、その社會の政治、經濟構造は母國の構造と異なる。

ホブソンが問題とする帝國主義は、近代的な帝國主義であり、「多數の相競争する帝國という觀念」である。したがって、古代帝國主義を含む、帝國主義一般を問題対象とするのではない。この近代帝國主義の始まる時期は、一八七〇年以後と考えられている。

ホブソンは、ナシヨナリズムは本來的には悪ではないと考える。このナシヨナリズムは國際主義に發展しうるものである。ローマの帝國主義には、このような純粹な意味での國際主義の要素が含まれていた。また、十八世紀ヨーロッパの知識階級を支配した世界主義には、國際主義の要素が見られた。ナシヨナ

リズムが、國際主義への發展の道を阻まれるとき、帝國主義への逸脱が起ると考えられるのである。並存する諸帝國が政治的に對立するが、この敵對の本質は、「市場のための戦い」であつて、近代資本家的生産の諸條件を詳細に分析しなければ、明らかにすることのできないものである。かくして帝國主義の經濟學を分析することが必要となる。

第一章、「帝國主義の大きさ」この章では、帝國主義と植民主義が相異なるものであることを、イギリスの例において、事實と數字によつて明らかにする。その結果二つのことが明白となつた。第一、新たに獲得された領土は、白人が定住することを欲しないような熱帯地方である。第二に、ほとんどすべての土地に劣等人種が稠密に住んでおり、母國の市民的自由はかれらに與えられなかつた。

第二章、「帝國主義の商業的價值」においては、帝國主義の利益が、國民所得の中の、全く僅かな部分であることが、その反面、帝國主義の費用は、直接、間接にばく大であることが明らかにされる。第一、イギリスの對外貿易は、國內の産業および貿易に比較して、その割合が減少しつゝある。第二、對外貿易の中では、植民地との貿易は、諸外國との貿易に比較して、その割合が減少しつゝある。第三、植民地との貿易は、質、量ともに劣っており、不安定、かつ停滯的である。

このような傾向は、植民地の自立化の傾向、工業國間の貿易の増大などによつて、植民地と本國との商業的關係が減少する

J・A・ホブソン研究

ことにもとづくものと考えられている。

第三章、「人口の捌け口としての帝國主義」においては、イギリスの人口は過剰ではなく、人口問題の解決を帝國主義に求めるといふ主張の無意味なことが論證される。

第四章、「帝國主義の經濟的寄生者」はレーニンが帝國主義の本質を把握するものとして、高く評價した部分である。

以上の諸章で明らかになつたように、帝國主義は利益よりも犠牲が多いのに、何故行なわれるのであろうか。それは、一部の利益 (sectional interest) が、國民全體の利益よりも優位におかれるからではないか。ホブソンはこれを假設として設定する。そしてこの假設によつて帝國主義を説明するためには、次の二つの間に答えなくてはならぬ。第一、帝國主義によつて利益を受ける、組織的、特殊な利益集團が存在するか。第二、この集團は、帝國主義の政策を推進する力をもっているか。ホブソンはこの二つの間にイエスと答える。金融業者を頂點として、造船業者、蒸氣機關製造業者、大砲及び火藥製造業者、輸出貿易向大製造業者、海運業者、軍人、および植民地官吏は、この様な利益集團である。

金融業者は、帝國主義に對して二重に利害關係をもっている。第一に投資家としての利害關係をもつ。第二に、投機業者、金融取引業者として、(1)公債の發行、(2)會社の創設、(3)價格變動を起すという機能を果す。これらの機能は政治に密接な關連をもつことが有利であり、必要である。かくして、金融業

者こそは帝國主義のもっとも重要な要素を構成するのである。

しかしながら、金融業者は表面上、あまり目立たない。また、愛國心、冒險、軍事的企圖、政治的野心、慈善などの非經濟的要因が、帝國主義で演ずる役割は大きい。ホブソンは、このことを、どのように解するであろうか。非經濟的要因は、純粹であり強力であるが、不規則であり、盲目的である。金融的要因は、このような性質をもつ諸勢力を操作するのであり、集中心と計算を行うのである。したがって、金融的要因は、公然と現われないうで、本質的に愛國心の寄生者であり、その保護色によってかくされている。

第五章、「保護貿易制度を基礎とする帝國主義」においては、帝國主義が莫大な軍事費を正當づけるために、新領土を市場として母國に結びつける努力、すなわち、保護貿易主義が公然と採用されることが述べられる。

第六章、「帝國主義の經濟的根柢」においては、これまでの諸章で展開された論旨を決定的にすることが目的である。なぜかと言へば、對外投資市場を求める過剰資本の壓力が、帝國主義を必要とするという議論を批判しなくてはならない。

ホブソンは帝國主義を必然と考えるのは誤りであるとす。帝國主義を必要とするのは、産業發展ではなくて、消費力の悪分配であるからである。したがって、過剰貯蓄こそが、帝國主義の根柢なのである。この過剰貯蓄は帝國主義によらないでも解決することができる。第一は高賃金と租税によって過剰貯蓄

を吸収する。第二に、國內市場の開發の可能性はラウントリの貧困調査によって、裏づけられている。第三に、外國貿易を目的として、産業の専門化が不健全かつ不自然に行なわれていることを改革することである。これらの對策を推進する勢力として、労働組合主義と社會主義に期待がよせられるのである。

第七章、「帝國主義の財政」においては、間接税、關稅收入、造船業への獎勵金、公債の發行が、帝國主義の費用として、負擔を大衆に轉嫁しつつ調達されることが説明される。

第二部、第一章、「帝國主義の政治的意義」本章では、イギリス人はすぐれた統治能力をもち、イギリス國內における自由な自治の技術を全世界に廣めようと決心しており、しかもその事業に成功しつつあるという説が全く誤りであることが、徹底的に批判されている。

第二章、「帝國主義の科學的辯護」は、生物學的進化論によって帝國主義を辯護する立場が誤りであることを批判している。

第三章、「道德的及び感情的要因」本章においては、帝國主義は以上のごとく卑しいものであるにもかかわらず、一般にそのように認識されない理由が説明される。それは保護色によって非難を免がれているのである。愛國心をよそおう帝國主義はキリスト教を喰い物にし、學校制度を支配する。教員の任免、教科書の制定などにおいて支配を行い、大學における研究の自由も危機にあることが説かれている。

第四章、「帝國主義と劣等人種」、第五章、「アジアにおける帝

「國主義」においては、白人が劣等人種を統治する一般的原则が存在しないこと、現状においては、白人は劣等人種に寄生していること、アジアが西歐帝國主義の試金石であることが論ぜられる。

第六章、「帝國的連合」においては、植民地が本國より分離する傾向にあることが豫想されている。

第七章、「結論」省略。

(18) 前にも示したように、「帝國主義論」は一九〇二年初版、一九〇五年第二版、一九三八年に改訂第三版、一九四八年第四版が出ている。要約は、初版本によるべきであるが、入手できなかったので、止むを得ず、第四版によった。第二版においては「事實と數字を出来るだけ最近のものに直し、多くの附加と削除を行い、又ある場合には議論の方法も改めた。」(第二版序文、矢内原譯、九頁。)第三版には、新たに長い序文が付け加えられたが、序文においては、本文における改訂は具體的に示されていない。「この第三版は“entirely revised and reset edition”と銘うたであるから全訂版とでもいふべきであろうが、本文そのものの内容は舊著とほとんど變りなく、ただ巻頭に新しく長い『序説』(Introduction)が書き加えられたのと巻末の附録に新しい統計が添えられたのが、目立つ相違にすぎない。」(靜田均「帝國主義の經濟學(一)」——J・A・ホブソンに關する省察——「經濟論叢」第七十一卷、第一號、

J・A・ホブソン研究

昭和二十八年一月、五一頁。)

したがって、「帝國主義論」に關する限り、初版から第四版までにそれほど大きな變化が加えられたとは思われないようである。「帝國主義論」については、この他、靜田均「反帝國主義者ホブソン」(前掲)、清水嘉治「J・A・ホブソンに關する試論——『帝國主義論』成立までの思想と生活について——」(經濟系、三一輯、昭和三十一年九月、がある。

三 「帝國主義論」の形成まで

ホブソンは、「帝國主義論」(初版一九〇二年)に先立って、「南阿における戦争」(*The War in South Africa*)を一九〇〇年に、「對外強硬主義の心理學」(*The Psychology of Jingoism*)を一九〇一年に書いている。ホブソンにこれら一連の著作をなさしめた直接の動機は南阿戦争である⁽¹⁹⁾。

かれが、南阿に派遣されたのは、帝國主義に關する論文を書いたためであった⁽²⁰⁾。したがって、南阿へ視察旅行する以前に、かれは帝國主義に對する問題意識を抱いていたわけである。何か、かれに、この論文を書かせたのであろうか。それには貧困および失業に對するかれの問題意識を探る必要がある。

ホブソンは一八八九年、マンマリーと共著で「産業の生理學」を著わした。これは過剰貯蓄論を展開したものである。資本の側の過剰貯蓄は、勞働の側の過少消費を意味した。かれはつづいて一八九一年に「貧困問題」(*Problems of Poverty*)、一八

九六年に「失業者問題」(The Problem of the Unemployed)を著わした。當時、すなわち、一八八九年から一九〇一年にわたって、チャールズ・ブリスとシーボーム・ラウントリーが、大都市における貧困の社會調査を行った。この調査は、當時の有識者に對して、古典學派の貧困、失業觀についての疑問を抱かせる發端となつた。ホブソンはブリスの著書を「社會研究の新部門の基礎を置くものであり、劃期的な書物である」と述べている。かれが、貧困問題を著わしたのは、「痛ましい社會疾病としての貧困の抑壓を扱う」のが目的であつた。

一八七三年から一八九〇年の中頃までは、いわゆる「大不況」の時期であるが、當時の労働者の生活状態についてホブソンは次のように理解していた。レヴィ (Leon Levy) やギフエン (Robert Giffen) のその當時の統計調査によると、貨幣賃金は上り、物價は低下し、労働時間は短縮され、食事の質は向上し、犯罪は減少し、貯蓄は増加した。ホブソンはこれらの事實を引用した後、次の理由を擧げて、貧困は増大しつたと主張した。(1)比較する時代が問題である。一八三〇年—一八四〇年と比較すれば、貧困は減少しつたと云える。一七九〇年—一八四〇年と比較するならば、例えば、南部の農業労働者の生活状態は、悪化している。(2)物價の値下りは、警澤品に多く生活必需品はむしろ値上りしている。パン、茶、砂糖は下つたが、間代の値上りは甚だしく、過去五十年間に一倍半になつていく。野菜、牛乳、卵、チーズ、石炭、肉、油などはすべて値上

りしている。衣料は値下りしているが、労働階級には比較的關係が少ない。一般的な價格の低落で利益を受けたものは、低所得階層ではない。(3)貧富の差は甚だしくなり、特に最悪の時代を除いては、現在より貧民の数の多い時代はない。(4)義務教育、安い新聞、圖書館、などの普及によつて、労働者階級の自覺が高まり、不満の意識は増大している。このように、ホブソンは、相對的な窮乏化、および、主觀的窮乏化として労働者の生活状態を理解していた。

ホブソンは「失業者問題」においては、失業がそれまで考えられていたように、個人のモラルの問題ではないこと、過少消費が、經濟的悪の原因であることを示さんとした。かれは失業の根本的原因は、生産力の一般的過剰と過少消費にあると考へたのである。

以上のように、ホブソンは貧困と失業が、經濟機構の矛盾に根ざしていることを鋭く認識するのであるが、これだけでは、まだ帝國主義への問題意識には直結しない。

ホブソンが南阿へ旅行したのは、一八九九年の夏から秋にかけてであつた。南阿の紛争は一八七一年からすでに始まつており、セシル・ローズがジェマソンをして私兵を率いてトランスヴァールに侵入させたのは一八九五年である。かれが南阿に旅行した一八九九年には、チェンパレンが南阿に兵力を増強し、トランスヴァールに内政干渉を開始した。ホブソンはこの一年前、すなわち、一八九八年に、「社會改革者、ジョン・ラスキ

ン」(John Ruskin. Social Reformer)を發表している。ラスキン研究はホブソンの問題意識の形成にあって、特に重要な地位を占めていられると思われる。ホブソンは元來、オックスフォードでは古典の研究をしたのであり、ラスキン研究はその一端にしかすぎない。ホブソンの思想的基盤は一生を通じて、古典研究に基くヒューマニズムである。これは、貧困や失業に對する問題意識に先行し、さらにその背後にあって基盤をなすものである。⁽⁸⁷⁾

社會問題を廣くあらゆる關連において捉えること、これこそホブソンがラスキンの最大の貢獻であると認めたものである。⁽⁸⁸⁾ またラスキンには戦争を讚美する思想があるが、ホブソンは聖戰といえどもこれに従事する者の人間性を墮落させるとして、強く批判している。⁽⁸⁹⁾ これに加えて、ラスキン研究に溢れる社會改革の精神は、ホブソンをして南阿の紛争と、イギリスの外交政策と對外輿論とに、無關心であることを許さなかつたであらう。

「帝國主義論」の第四章「帝國主義の經濟的寄生者」において、帝國主義の機關手として、集中力と計算力をもつものは、金融業者であることを強調した。ホブソンはこの事實を南アフリカの分析において得たことは、確かである。われわれは、この分析を、「南アフリカにおける戦争」の第二部、「ランドの資本家の政策」に見ることが出来る。南アフリカの金融界、産業界を支配しているのは、ドイツ系ユダヤ人からなる國際金融家

J・A・ホブソン研究

の小グループである。⁽⁸⁴⁾ かれらは、ランド地方の經濟に獨占的支配を確立している。鑛山業・鐵道のみならず、電信、新聞なども勢力下におさめている。⁽⁸⁵⁾

南阿戦争によって利益を受けるのは、これら少數の金融業者である。(1)鑛山の經營を、さらに能率的にすることが可能となる。(2)投機活動に對して利益を與える。(3)鑛山に低廉な勞働力を豊富に供給できる。しかも、イギリスは如何なる利益を受けることができるのか。イギリス人が南アフリカに農業移民として多く定着する可能性は殆どない。ボア人はオランダ人が十六世紀に移住、農業に定着したものである。イギリス人は鑛山業に従事し、定着性は少ない。ゆえにイギリス人は南阿における人口比率の上で少數者であり、この状態からの脱却する見込みは少ない。劍によって確立される支配は、劍によって倒されるであらう。⁽⁸⁶⁾ イギリスに與えられたジレンマは、ユダヤ人金融業者の寡頭制を選ぶか、ボア人の支配の回復を認めるかにある。また、かりにイギリスの支配が確立されるとしても、黒人の自由化と文明化は期待されないであらう。⁽⁸⁹⁾ これがホブソンの展望であつた。

南阿における戦争が、一部階級の利益であり、イギリスの國民、ボア人民、アフリカ人何れの利益にもならないことが、以上において明白になった。なぜ、このような戦争が戦われるのであろうか。「對外強硬主義の心理學」はこの問題に答えようとするものである。

一橋論叢 第三十七卷 第五號

南阿戦争にさいしてイギリス國內の輿論は沸きかえった。これは誤れる輿論形成である。ホブソンは、この對外強硬主義を形成し維持するところの輿論の形成過程を診断せんとしたのである。

南阿戦争は必然であり不可避であると議論される。しかし、これは根據のない議論である。なぜかと言へば、イギリス植民地とボア共和國の間には、人種的にも、思想的にも、また制度的にも、何らの敵對心を根本的な矛盾は存在しないからである。⁽¹⁹⁾

對外強硬主義の機關は、新聞である。南阿政策については、全國の新聞の論調が一致する。これは、すべての報道がケーブタウンとヨハネスバークから來るからである。ロンドンの二大新聞、タイムズ紙は、ヨハネスバークのスター紙から、デーリー・ニュース紙はケーブ・タイムズ紙から報道を供給されている。地方紙は、組合新聞、自由主義系新聞、宗教新聞など一切が、ロンドンの二大紙に従う。

しかも、南アフリカの新聞は、キンバリーのダイヤモンド嶺山、ランドの金山、植民地政府を支配する、少數の金融業者によって所有されている。かれらは、自ら新聞記事を書く必要はない。氣に入る記事を書く編輯者を雇い、そうでない者を誠にさえずればよいのだ。⁽²⁰⁾

政界、教會も新聞の論調に盲従し、シノーヅック・ホールや酒場が對外強硬主義を煽る最上の場所となる。ホブソンは當時

のイギリスには、フリー・プレスは存在しなかつたとさえ極言している。⁽²¹⁾ かくして、これら金融業者は愛國心のかげに隠れることができる。しかし、この愛國心のスクリーンが不充分なきには、「金融業者の手が、人形を動かしている政治の舞臺でも見えた」のである。⁽²²⁾

金融業者の支配力、集中と計算の能力、および愛國主義に寄生するという本質が、ここに鋭く把握されて、「帝國主義論」の礎石が構成されたのである。

(19) 「南阿戦争は、わたくしの生涯の轉機でもあり、その後の著述の大きな部分を占めることになった經濟と政治との眞の關係についての理解に光を與えるものであった。」
(*Confessions of an Economic Heretic*, p. 59.)

(20) ホブソンは、一八八九年三月に *Contemporary Review* に、南阿の歴史に言及して、帝國主義の關する論文を寄稿した。たまたま、この論文が *Manchester Guardian* の政治論説の指導者、L・T・ホップハウスの眼にとまり、かれは編輯者C・P・スコットにすすめて、ホブソンを南阿に派遣させた。(Ibid., p. 60.)

(21) Charles Booth; *Life and Labour of the People in London*.

(22) Seebom Rowntree, *Poverty: a Study of Town Life*, 1900.

(23) W. H. B. Court, *A Concise Economic History of*

Britain. From 1750 to Recent Times, 1954. pp. 275-277.

(24) Hobson, *Problems of Poverty*, 1891. p. 6.

(25) *Ibid.*, p. 1.

(26) *Ibid.*, pp. 22-28.

(27) Hobson, *The Problem of the Unemployed*, 1896. preface.

(28) 拙稿「J・A・ホブソンの資本の集中・獨占の理論」

明治學院論叢、第四十號、第二輯、昭和三十一年二月。「經濟學と社會關係——J・A・ホブソンの經濟學における——」

「上田辰之助監修、「近代社會の諸問題——經濟發展と社會關係——」所收、近刊を参照されたい。

(29) Hobson, *The War in South Africa*, 1900. p. v.

(30) 「主として、ローマ、ギリシャ文明の文學的、歴史的、および哲學的研究に費されたオックスフォードにおける四年間は、私がおのち、經濟學に適用しようとした合理主義と、ヒューマニズムに少なからず役立った。……これらの年月の研究から、私は一つの傾向、および、あまりにも功利的であると言えらるる當時の支配的な觀念や感情をたやすく受入れてしまわないように、私を自由にしてくれることに、ひじょうに役立つたと思ふ。」(*Confessions*, p. 26.) 「かれら〔貧しい、ぼろを着て裸でいる子供たち〕は、私に、それほど憐びんや困惑の觀念を興えず、あらゆる可

J・A・ホブソン研究

能な最上の世界においても『すべてが正しくはならぬ』と、う感情を、はじめて興えただけだ。しかし、わたしは、この感情を經濟思想の明確な種子であるとは思わないだろう。なぜかと言えは、わたしが、『貧困の問題』に自ら關心をもつに到ったのは、もっと後のことだったからである。」(*Ibid.*, pp. 16-17.)

「わたしは、これら、すべての運動〔フェビアン協會、ハインドマンの社會民主協會、キリスト教社會主義者〕にある同情を感じ、かれらの會合に出席し、その若干の指導者たちと知合になったが、フェビアン主義者を例外として、かれらは、あまりにも煽動的であり、感情的であつた。」(*Ibid.*, p. 29.)

(31) 「かれ〔ラスキン〕は、他のいかなるイギリス人よりも、社會問題の本質を人間生活のあらゆる部門に影響のある廣い關連のある問題として認識し、最高の道德義務觀をもつて對處することを強く唱道したと言えらるであらう。」

Hobson, *John Ruskin*, p. vi.

(32) *Ibid.*, p. 325.

(33) Hobson, *The War in South Africa: Its Causes and Effects*, は、第一部「一八九九年のボア共和國」第二部「ランドの資本家の政策」第三部「解決への途」から成立している。第一部は、ホブソンが一八九九年、南アフリカに旅行して、共和國およびイギリス植民地側の要人と

一橋論叢 第三十七卷 第五號

の會見、その他、實地の見聞にもとづいて、マンチエスタ
ー・ガーディマンに發表した現地報告の論文を主として集
めたものである。第二部、第三部は、その經濟的、政治的
分析であり、その多くのものは、スビーカー紙に掲載され
たものである。

- (34) *Ibid.*, p. 189.
- (35) 生川榮治、前掲書、二九四—三〇六頁。
- (36) *The War in South Africa*, pp. 229—231.
- (37) *Ibid.*, p. 277.
- (38) *Ibid.*, p. 305.
- (39) *Ibid.*, p. 313.
- (40) Hobson, *The Psychology of Jingoism*, p. 89.
- (41) *Ibid.*, pp. 109—111.
- (42) *Ibid.*, p. 112.
- (43) *Ibid.*, pp. 113—114.
- (44) *Ibid.*, p. 119.
- (45) *Ibid.*, p. 131.
- (46) Hobson, *The Evolution of Modern Capitalism* に
は第十章「金融業者」があり、南阿の實例が出てゐるが、
この章が加えられたのは一九〇六年の改訂版からである。
(1894, 1901, 1902, 1904, New and rev. ed. 1906, 1917,
1930, 1949.)

四 「帝國主義論」以後

帝國主義に關するホブソンの見解には、「帝國主義論」以後ど
のような變化があつたであらうか。ウインスロー、靜田教授お
よびネマーズは、何れも、ホブソンの見解に變化があつたこと
を指摘している。⁽⁴⁷⁾ ホブソン自身も、ある意味で自己の見解に變
化があつたと述べている。⁽⁴⁸⁾ ここでは、ホブソンの著作の中に、
變化の跡を辿つてみることにする。

最初にあらわれた變化は、「投資の經濟的解釋」(*An Eco-
nomic Interpretation of Investment*, 1911) に見出される。
ホブソンは、ここで國際投資における新しい傾向があらわれた
ことを指摘してゐる。「帝國主義は……特に金融開發の二つの
最も重要な分野である南アメリカと極東に關連して、その性格
を變えつつある。」⁽⁴⁹⁾「このおだやかな(Hilder)帝國主義は明ら
かに平和的な性格であり、後進國間の秩序と發展の促進、およ
び大國間の羨望を和げるものである。」⁽⁵⁰⁾この様な變化は、メリ
カ合衆國が、國際投資の仲間入りをはじめたために生じたので
あるとホブソンは言う。

ここで二通りの解釋が可能である。第一は、ホブソンが國際
投資における新しい傾向、帝國主義の性格の變化という事實を
指摘したことは、帝國主義そのものの變化であつて、ホブソン
の見解の變化とみるべきではないという解釋である。第二は帝
國主義そのものに變化がなくて、ホブソンが新たにその變化を

指摘したことは、ホブソンの帝國主義に對する見解に、變化があつたという解釋である。しかし、わたくしはホブソンには見解の變化がなく、國際投資の側に變化が起つてきたのだと解釋したい。

その理由としては、帝國主義に關するホブソンの見解には、あまり變化がみられないことが注意される。「帝國的擴張の希望は……投資の歸結である。……強國をして、弱少國に對し政治的影響やコントロールをさせる主たる原動力は、金融投資のきづなである。」⁽⁵⁵⁾南阿戰爭に對する見解にも變化は見られない。

ウインスローも指摘しているように「國際政府への道」(Towards International Government, 1915)には、帝國主義の對策としての、國內の消費水準の向上は擧げられていない。⁽⁵⁶⁾しかし、「合理化と失業」(Rationalisation and Unemployment, 1930)には、「購買力の缺乏」という一章があり、消費水準の重要性が否定されているわけではない。ホブソンが、「もっとも純粹に文明化された國」として、北歐諸國やスイスを讚美していることは、對外進出の代りに、國內開發、したがって消費水準の向上を重視していることを示すものである。また、「國際政府への道」において、帝國主義そのものについての見解には、大きな變化は見られない。

「戦後の民主主義」(Democracy After the War, 1917)においては、帝國主義の眞の原因として保護色をもつ一群のビジネスマンという表現が見られる。⁽⁵⁷⁾

J・A・ホブソン研究

さきにもたように、「投資の經濟的解釋」において、ホブソンは國際投資の傾向の變化を指摘したが、かれは手離して樂觀しているわけではないと思う。「疑もなく、われわれの議論は、如何なる國民の歴史に示されたよりも、より多くの理性と計算された政策が、完全に行なわれることを假定するものであると言えるであろう……」⁽⁵⁸⁾また、變化しつつある國際投資にも危険の徴候がないわけではない。國際カルテルのように、列強の帝國主義が共同して、後進國を搾取するおそれがあるからである。⁽⁵⁹⁾

次にホブソンは、レーニンの帝國主義論(一九一七年)を、どのように評價していただろうか。ホブソン自身は、レーニンについて直接の評價をしていない。しかしヴェブレンに關連して、レーニンへの言及が見られる。ホブソンは、ヴェブレンが、帝國主義についてマルキシズムの解釋に近いものと期待したが事實はそうでなかった。ヴェブレンはレーニンの「帝國主義論」に受け入れられているマルクスの解釋を無視している。これはヴェブレンが帝國主義について、經濟的原因よりは、愛國心の心理學を重視したためである。⁽⁶⁰⁾この點において、ウインスローは、ホブソンが、ヴェブレンを批判していると述べている。しかしホブソンが批判した點は、ヴェブレンがマルクスの解釋に盲目的であつたことに對するよりは、ヴェブレンが、「有效な世界政府の可能性に對する、しんしな希望」⁽⁶¹⁾を認めなかったことに對してであると思われる。ヴェブレンは愛國主義の心理

學を重視するのあまり、ドイツの絶滅以外に平和の希望はないと考へていたからである。⁽⁴⁷⁾

ホブソン自身は、マルクスに對しては、「資本論」を英譯で讀んだけれども、勞働價值説と唯物辯證法におしげがついたと言つてゐる⁽⁴⁸⁾。したがつてホブソンは、ヴェブレンがマルクスの解釋に盲目的であると批判しても、かれ自身がマルクスの解釋に賛成だと言つてゐるわけではない。しかし、ブレイ・ルースフォードはホブソンがマルクスを受け入れなかつたにかかわらず、かれの經濟史觀がきわめてマルクスに類似していると述べてゐる。⁽⁴⁹⁾

以上に見られたように、帝國主義の解決について、何らかの形における世界政府への希望が、強くなつてゐたことは確かである。帝國主義に對する強調點が經濟より政治へと移行してゐたのである。⁽⁵⁰⁾

(47) 註(13)。(14)。(15) 参照。

(48) 註(16) 参照。

(49) Hobson, *An Economic Interpretation of Investment*, pp. 116—7.

(50) *Ibid.*, p. 117.

(51) *Ibid.*, p. 108.

(52) *Ibid.*, p. 106.

(53) Winslow, *op. cit.*, p. 102.

(54) *Confessions*, p. 70.

(55) *Democracy after the War*, p. 67.

(56) *An Economic Interpretation of Investment*, p. 122.

(57) *Rationalisation and Unemployment*, p. 115.

(58) ホブソンはヴェブレンの貢獻を次のように評價してゐる。「全く、典型的資本主義國家であるかれ自身の國〔アメリカ〕の人々の行爲に、新しい形式で經濟的決定論を適用したことは、ヴェブレンがかれの時代の思想に與えた本質的な貢獻であると思はれよう。」(Hobson, *Veblen*, 1936, p. 65.)

(59) *Ibid.*, pp. 150—1.

(60) *Ibid.*, p. 140.

(61) Veblen, *The Nature of Peace*, p. 202. Cited by

Hobson in *Veblen*, p. 144.

(62) *Confessions*, p. 35.

(63) H. Brailsford, *Life Work of J. A. Hobson*, p. 6, 1948.

(64) ホブソンの經濟的國際主義のこゝでは、別の機會に詳しくとりあげた。

五 ちす

不完全ではあるが以上の分析にもとづいて、一應の結論を述べてみた。その意味で覺書的結論として、今後の完成を期した。

〔ホブソンの「帝國主義論」を經濟的帝國主義を規定するこゝとびらつ

ウィンスローはホブソンの「帝國主義論」を經濟的帝國主義の理論と規定している。⁽⁶⁵⁾ たしかに、「帝國主義論」においては、經濟的要因が強調されているが、第一部「帝國主義の政治學」、「對外強硬主義の心理學」など、非經濟的要因にも、大きな注意が拂われている。ホブソンは後に「帝國主義論」の社會學的考察を理想と考えたらしい。⁽⁶⁶⁾

ラスキンに於いては、社會問題を統一的に把握しようとしたのであるから、ホブソンを一義的に經濟的帝國主義として規定してしまうことは、いささか疑問に思われる。

シュンペーターの「帝國主義論」は社會學の論であるが、いわゆる經濟的帝國主義論に對する批判である。その意味で、兩者の「帝國主義論」を比較することは興味がある。簡単に述べるならば、シュンペーターは標語としての帝國主義と、實踐としての帝國主義を區別する。實踐としての帝國主義は、無目的的な衝動にもとづくものであって、決して經濟的、目的的ではない。資本主義以前の生産様式によって支配されるものであり、その意味で隔世遺傳である。標語としての帝國主義は、いわゆる十九世紀後半におけるイギリスの帝國主義であって、保守黨のスローガンであり、實踐には移されないものである。イギリスは實踐としての帝國主義には、もともと縁の少ない國の一つである。イギリスにも帝國主義的活動も存在しないことはないが、これは私的な帝國主義である。民主化された國家、「純粹の」資本主義の下においては帝國主義は絶滅する。ホブソンは

J・A・ホブソン研究

運動、實踐としての帝國主義を問題としているのであって、標語としての帝國主義という概念はない。帝國主義の原動力である愛國主義者は、シュンペーターの場合と同じく盲目的である。しかし、金融業者という集中と計算を行なうものがあるのである。ホブソンが問題にした、南アフリカの金融業者は、シュンペーターに言わせると、私的帝國主義であろう。シュンペーターに於いては、計算が帝國主義を阻止すると考えられ（標語としての帝國主義の場合、および「純粹な」資本主義の下で）、ホブソンに於いては、計算が帝國主義を操縦すると考えられる。もともとホブソンの場合も、國民全體の計算の立場から言えば、帝國主義は阻止されるべきものであり、資本主義を改良することによって解決される。改良された資本主義と、「純粹な」資本主義とが、かりに近いものであるなら、兩者の説は思ったより接近しているものと言えよう。ウィンスローも靜田教授も、ホブソンとシュンペーターの類似を指摘しておられる。

(二)ホブソンの帝國主義に對する見解の變化について

ホブソンの見解を經濟的帝國主義と規定するならば、ホブソンの見解は明らかに變化したと言える。しかし、この規定に疑問があるとするならば、いわゆる、ホブソンの見解の變化は如何に解釋されるべきであろうか。ホブソンも認めるように、強調點が、經濟的要因より、政治的、社會的要因に、移行したことは動かないことである。

「帝國主義論」以後の諸著作においては、右の變化にもかかわ

らず、「帝國主義論」における根本的な見解には、變化がなかったと解釋すべきではなからうか。すでに指摘したように、「帝國主義論」の一九三八年の全訂改版においても、大きな變化は見られないのである。

(三)帝國主義の必然性について

ホブソンは一貫して、帝國主義は必然的、不可避的でないという見解であった。帝國主義は過剰貯蓄にもとづく過少消費によるのであって、資本輸出そのものではない。資本輸出の變化、すなわち、國際投資の性格の變化が、過少消費に對する對策、國際政府などによって、起りうるならば、帝國主義は阻止されうると考へるのである。なお、ヌルクセは資本輸出そのものは、望ましいと主張しているが、南アフリカについては例外であるとしている。⁽⁶⁵⁾

最後に、ホブソンの學說の斷層の問題についてふれたい。わたくしは、さきにホブソンにおけるギリシャ、ローマの古典研究と、ラスキン研究の重要性を指摘したが(本稿九頁)、社會問題を全人格的に把握せんとするヒューマニズムは終始一貫して、ホブソンの思想の底流をなしていると思はれる。したがって、ネマーズの言うごとく、厚生經濟學がそれ以前の學說に無関連に出てくるというよりは、厚生經濟學は、むしろホブソンの本質的な傾向として、約束されたものであると言えよう。ここにこそ、ホブソンの眞價があるものと思はれる。一八八九年の「産業の生理學」から、一九〇九年の「産業制度論」までのホ

ブソンの經濟學が、むしろヒューマニズムの上に、幾分、異質的に位しているとも言えよう。そうであるからと言って、經濟學者としてのホブソンの地位を輕んずる意味ではない。かれ自身も、「過剰貯蓄」という經濟分析の用具を、「せまい經濟的異端の網」(the network of a narrower economic heresy)⁽⁶⁶⁾と呼んでおり、「數量的經濟學の範圍における正統學派との論争」と言っている。たしかに、ホブソンにおいては、經濟分析の用具の研磨はおろそかにされ、問題を全人格的、統一的に把握せんとすることに急であつたため、論理の矛盾が生じた嫌いはあろう。しかし、ホブソンには、經濟分析の用具はあくまでも手段であつて、目的ではない。理論のための理論は、かれには關心のあるところではない。ヒューマニズムに根ざして、實踐的な意欲があつてこそ、經濟分析も意味がある。ホブソンの眞價はここにあつたのではあるまいか。

(65) E. M. Winslow, *op. cit.*, p. 92.

(66) 註(16)参照。

(67) 註(18)参照。

(68) Ragnar Nurkse, *Problems of Capital Formation in Underdeveloped Countries* 1955, p. 128 n.

(69) *Confessions*, p. 29.

(70) *Ibid.*, p. 164.

(71) A. H. Hansen, *A Guide to Keynes*, N. Y., 1953, p. 7.
(一九五七・二・二八) (明治學院大學助教)